

平成24年度 第39回日独スポーツ少年団同時交流事業に、富山県スポーツ少年団リーダー会に所属する高校生3名 吉島 大貴さん 小泉 遙さん、新村 瑛里子さんが日本スポーツ少年団派遣団員として参加しました。

8月1日から18日まで、ドイツ連邦共和国へ派遣され、異国のスポーツ文化を学んできた寄稿文です。

## 「日独スポーツ少年団同時交流事業 ドイツ派遣団員に参加して」

新村 瑛里子

今回の日独同時交流は、とても貴重な体験となりました。出会った人、見るもの、聞くもの、触れるもの、全てが新鮮で、充実した毎日を過ごすことができました。

特に印象に残っているのが、ドイツ人のスポーツの取り組み方です。私が考えている日本人のスポーツに対する意識は、一人が一つの種目しか行わない、ということです。しかし、ドイツの人々はサッカーやバスケ、ビーチボールなどと、複数の種目を行っていて、ドイツではスポーツに対する意識の幅が広いのだと感じました。また、ドイツの学校は半日制の学校が多く、午前中は授業、午後はスポーツ活動を行っている人が多い、と聞いて驚いたし、日本との違いを再認識しました。

また、ドイツでは体育館やスポーツジムなどの施設はもちろん、アスレチックのような野外施設も多々あり、自然と触れ合いながら体を動かせるのは、良いことだと思いました。日本にもこのような施設がつくられるといいと思います。

ドイツでは、普段日本で体験できないような数多くの事を体験することができました。言葉の壁が一番大きな不安材料であったけれど、スポーツ活動などを通して、徐々にコミュニケーションをとることができて嬉しかったです。

今回ドイツで学んだことを、これからのリーダー会活動に取り入れることによって、よりよい活動を行っていきたいです。そして、この富山県リーダー会を発展させていきたいと思います。



小泉 遙

今回の日独同時交流に参加して実感したことは、ドイツの子供たちは日本の子供たちより何事にも積極的であるということです。

ドイツの子供たちの休日は、いつも外で元気に遊んだり、アスレチックなど運動できる娯楽施設に行ったり、クラブチームでスポーツをしたりと、積極的

に体を動かしています。ドイツのサイクリングを体験したとき、最初は1時間ほど家の周りを散策する程度だと思っていました。しかし、実際は2時間以上ロードバイクで森の中を走りました。日本人の私たちは、息がきれているにも関わらず、彼らは疲れた様子も全く見られませんでした。疲れどころか、まだ走り足りない様子でした。



それを見て、自分の体力のなさを実感し、それと同時に、彼らの有り余る体力は小さい頃から体を動かしているからあるのかなと思いました。また、彼らは努力して物事をやりとげたときの楽しさや達成感を知っています。彼らの積極性はここから生まれるのだと思いました。

私は日本の子供たちも積極的であってほしいです。そのために遊びを通して楽しさや達成感を知ってほしいです。楽しさなどを知ることで、次の楽しさを求めて積極的

に行動するようになると思います。スポーツはそれらを知る良いきっかけになります。将来、私が指導者として子供たちと関わる時、子供たちがそれらを知ることができる環境を作り、積極的な子供たちを育てていきたいです。

吉島 大貴

私にとってドイツで過ごした13日間は一生忘れられない思い出となりました。ドイツの歴史や文化、そして人とのコミュニケーション。たくさんのことを学び、たくさんの思い出を持って帰ることができました。

そんな中で私が一番印象に残ったのが水上スキーとハイロープアスレチックです。どちらも日本では見かけないスポーツで、そしてどちらも下手をすれば大怪我をするかもしれないというリスクのあるスポーツでした。実際に体験してみると高校生の私でも「危ない!!」と思う場面が何度もありました。そんなスポーツを小学生くらいの子供達が積極的に行っているのを見た時はとても驚きました。一般的に、小さい頃から様々なスポーツを体験していくことでスポーツに関するセンスが伸びると言われています。しかし日本では、スポーツの競技化により、一人一種目といった考えが広まっているため幼い時に様々なスポーツと触れ合う機会が減少しているように感じます。

私は、今回の交流で日本はドイツに比べてスポーツに対する意識、そして環境が整っていないということを痛感しました。これからは単位団での活動やリーダー会の活動を通してみんながスポーツをしやすい環境作りをしていきたいと思います。

